

【発表9】 海ごみゼロへ ～アートを利用した女木島の環境保全～ 穴吹学園高等学校 2年 西峰千尋

1. はじめに

香川県高松市沖に位置する女木島は、「瀬戸内国際芸術祭」の舞台として知られ、多くの観光客が訪れる美しい島である。しかしその一方で、深刻な漂着ごみの問題を抱えている。香川県の調査によれば、瀬戸内海の漂着ごみの約7割は陸からの流入であり、私たちの日常生活が海の環境に直結していることがわかる。本研究では、この海ごみ問題を「自分事」として捉え直すきっかけを創り出すことを目的とした。ごみを単なる「廃棄物」ではなく表現の素材として再定義し、アート作品への再生や、価値ある商品へ作りかえる実践を通じて、持続可能な海洋保全のあり方を研究した。

2. 研究の方法

- ・ 定点調査と清掃：5月から毎月、女木島北部の海岸で定期的な清掃を実施。季節や天気によるごみの種類や量の変化を確認した。
- ・ 専門的知見の導入：香川県が主催する「かがわ里海大学」の講座に参加し、専門家から海ごみがどこから来るのかということや、ごみの種類からその発生源を突き止める「調査型ビーチクリーン」の手法を学んだ。
- ・ 表現活動：回収した牡蠣養殖用まめ管などの漁具やプラスチックを素材として立体アートパネルを制作し、それを活用した啓発ポスターを島内各所に掲示した。また、細かいプラスチック片と貝殻を加工したキーホルダーを開発。女木港の売店で販売を依頼した。

3. 結果および分析

- ・ ごみの発生源に関する考察：調査により、生活ごみだけでなく、農業用の肥料カプセルや漁具などが目立った。特に大雨の後にごみが急増することから、内陸部から河川を通して海へ流れ込むプロセスを裏付ける結果となった。
- ・ アートによる認識の変化：ポスターを島内の港、漁協、農協、飲食店などに掲示を依頼した際、「ごみも視点を変えれば、大切なメッセージを伝える力を持つ」との評価を得た。
- ・ 価値の再創造の可能性：ごみを「海を旅してきた物語を持つ素材」と定義して商品化したキーホルダーは、販売を通じて、消費者が環境保全について対話するきっかけを作ることができた。

4. 考察

本研究を通じ、海を守るためには「正しい理屈」を伝えるだけでなく、人の心に響く「感性的」なアプローチが有効であると考えた。かがわ里海大学での学びから、「海の環境を守ることは、陸の生活を見直すことである」という本質に立ち返ることができた。私自身が研究を通じてプラスチックの使用を控えるようになったのと同様に、アートや商品という身近な「出口」を設けることは、人々の行動を変える強力な一助になると確信している。

5. 結論と今後の展望

本研究により、海ごみの回収から再利用、そして発信に至る一連の循環モデルを提示できた。今後は、ポスターの掲示効果や商品の購買層を詳しく分析し、活動が社会に与える影響を客観的に評価したい。芸術祭の開催地である女木島の特性を活かし、アートを通じた環境保全のメッセージを継続的に発信していく。



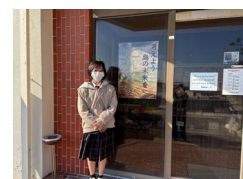
回収した海ごみ



ポスター作成



海ごみキーホルダー



ポスター掲示（漁協）